

図書ニュース

第2号

平成28年6月17日

北野高校図書館

佐村河内守著『交響曲第一番』(762/S24/1)という本が北野図書館の蔵書にある。著者の名前を正しく読める人は、この交響曲(実際には交響曲HIROSHIMAとして世に出た)が当時いかに話題になり、そして騒動を引き起こしたか知っているだろう。このとき「HIROSHIMA」の代作をしたことで有名になった新垣隆氏は、CMに出演したり、バラエティー番組でピアノの腕前を披露したりしながら、『音楽という〈真実〉』(762/N5/1)を著した。厳しい言い方をすれば「2人で」世間を騒がせたのかもしれないが、ここは2冊ペアで読んでみたら如何か？

そう言えば専門ピアニストでなくても、新垣氏のような作曲家や指揮者も含めてピアノが上手い人は多い。弦楽器しか弾けない私などから見れば、2段の譜面をどうやって見ているのか、左右の手を別々にコントロールするって何？とか疑問だらけ。私は語学も駄目なので、同時通訳者が全員とてつもない天才に見えるのと同じである。そこで1冊。古屋晋一『ピアニストの脳を科学する～超絶技巧のメカニズム』(763/F3/1)。冷静なタイトル。こういうスタンスを好む人が多いのか、北野図書館の音楽系蔵書の中では、珍しく頻繁に貸し出されている。

大作曲家が真摯に完成させた作品でも、初演の時には意外に酷評されていたり、誤解されたり、逆に曲に込められた真意が伝わりすぎて権力者から演奏禁止にされたり、興味深い事象はたくさんある。そこでニコラス=スロニムスキー『名曲悪口事典』(762/S22/1)を紹介したい。現代では下手に演奏すると演奏者の力量の方が酷評されるような超名曲も、初演当時は「不愉快」とか「汚いドブに人間の絶望を編み込んだ」とか、罵られ放題。

「ラデツキー行進曲」は人気曲の1つで、コンサートのアンコールピースとして有名。日本でも外国でも聴衆が手拍子を加えて盛り上がり、ウィーンフィルのニューイヤーコンサートで演奏されたりしている。しかし、この曲、国家統一運動をめざすイタリア軍と戦ったラデツキー將軍(オーストリア軍)の戦勝記念マーチである。知ってしまうと、手拍子に違和感を覚えてしまうのだが、まったく別のところでも「あれっ？」と思う瞬間がある。この曲はもともとニ長調で書かれている。多分、オーケストラで「ジャ〜ン」と響かせやすく、お祝いムードが出やすいから。ところが、あまりに人気があるため吹奏楽で演奏される機会も多く、管楽器向けの変ホ長調編曲版で聞こえてくると気持ち悪い。音感が有っても無くても、大きな違和感を持ってしまう。楽譜の書かれた調性によって、曲のイメージは変わってしまうのだ。古今東西の名曲がその調性で書かれた背景には、曲のイメージとの親和性がある。吉松隆『調性で読み解くクラシック』(761/Y3/1)という小

冊子を読んでみませんか？

作曲の背景と演奏の状況にギャップを感じる曲としてもう1つ。ショスタコーヴィチの交響曲第7番レニングラードは第二次大戦中、ドイツ軍に包囲されたレニングラード(現サンクトペテルブルク)の切迫した状況のもとで、作曲・初演された歴史的な大曲である。ひのまどか『戦火のシンフォニー～レニングラード封鎖345日目の真実』(762/H11/1)には貴重な史料写真とともに、何故命をかけてこの曲をこの都市で演奏したのか、克明に描かれている。ところで、この曲は日本では・・・今の高校生は知らないかもしれないが、シュワルツネッカーが出演した栄養ドリンクのCMに使われた。勇壮なリズムに乗って、意味不明の合唱とシュワちゃんの笑い声が重なり、強烈なインパクトを残した。原曲を知らない人は、このCMのために作られたと思うだろう。

前述の『名曲悪口事典』にも登場する作曲家で、今となっては20世紀最大の音楽的巨人のひとりと考えられるのが、ストラヴィンスキーである。「火の鳥」「春の祭典」に対する初演当時の悪口は同著にも載っているが、ストラヴィンスキーは世評に流されることなく、自分と同時代を生きる他国の芸術家を発掘し続けた。日本を代表する作曲家武満徹も、ストラヴィンスキーに自らの作品を聴いてもらうチャンスに恵まれ、世界で活躍するきっかけを得た。図書館には『武満徹著作集』(760/T7/6-1~5)のほか、小澤征爾との対談『音楽』(760/O13/1)もある。一度聴いたらすべてが分かるような作品を書く作曲家ではないが、氏の真摯な思考の軌跡を読めば、その作品群が難解さをこえて広く認められた理由に気づくだろう。ちなみに、『音楽』の表紙や本文中に使われている武満氏の写真を見ると、氏の抱えているオーケストラ総譜(スコア)の大きさ(楽譜の段数の多さ)にビックリしてしまう。

お口直しです。

前年度末に発行した北野図書館報の中で、食事のシーンが印象的な書物を紹介した先生が居られた。興味を持ってくれた人には、阿川佐和子『残るは食欲』(596/A5/1)もオススメ。エッセイ集だから分類記号は900番台だと思ったら、「596」ということで、食品・料理本に分類ですね。こういう本とか、音楽評論とかを読んで、自らの文章表現の幅も広げて欲しいです。

ちなみに筆者の好物はぼた餅と鮎です。きれいな写真付きの『すし手帳』(596/S8/1)も良ければ。

最後の1行は余計だったかな？

※最後の2冊の本は近日中に開架図書になります※